

興教大師の曼荼羅観 II

小峰 彌彦

はじめに

興教大師覚鑊の曼荼羅観については一度述べたことがある。⁽¹⁾ここでは覚鑊の曼荼羅理解には、『大日経疏』及び『秘藏記』の影響が強く見られることを指摘した。具体的に曼荼羅を理解する上で覚鑊は、自性・受用・変化・等流の四種身説を配当し解釈する。勿論この四種身説をもって曼荼羅を解釈することは、『秘藏記』にも見られるように伝統的になされているものだが、その配当の仕方などには見解の相違があり、必ずしも共通の理解のもとに曼荼羅がとらえられてきたとは言いきれないものがある。前稿では曼荼羅に関わるいくつかの問題点は指摘したものの、他の解釈との比較検討が充分でなかった。そこで重複する部分もあるが、今稿でもう一度考えてみたいと思う。

ここでは胎藏曼荼羅に絞って述べることにする。なぜなら、胎藏曼荼羅には、『大日経』所説曼荼羅」という所依の經典にもつづいた曼荼羅が存在すると同時に、もう一つ弘法大師の密教の確証ともいえるべき「現図曼荼羅」も存在するからである。というのもこの二つの重要な曼荼羅には大きな相違点があり重要な問題も含んでいる。しかしなが

ら胎藏曼荼羅というと、我々は「現図曼荼羅」をのみを考え「大日経」所説曼荼羅」には何等言及しない傾向にある。そこでこの小論では、これらのことを念頭に置きながら胎藏曼荼羅に関する種々な問題を考察し、最後に覚鑿の曼荼羅観について探ってみることにする。方法としては、一つには胎藏曼荼羅を成り立たせている根本思想たる「三句の法門」が、どのように曼荼羅思想と関連づけられ考えられたかを、いくつかの代表的な説をあげ検討する。次ぎに四種身説との関係について論究するつもりである。

三句の法門と胎藏曼荼羅

まず「三句の法門」と曼荼羅とが如何に結び付けられているか、について諸見解をあげてみたい。はじめに、現在一般に解釈されている代表的な考えを基本材料として取り上げ、これを巡って他説と比較し考察することとする。はじめに取り上げた考えは「現図曼荼羅」に対する解釈として今日一般的である。

まず中台八葉院と第一重(初重)の四大院(遍知院・持明院・観音院・金剛手院)は、因たる菩提心の徳をあらわす。ついで、第二重(釈迦院・文殊院・虚空蔵院・蘇悉地院・地藏院・除蓋障院)の六大院は根たる大悲の徳をあらわす。さいごに、第三重(外金剛部院)は、ひろくすべての生類におよぶ方便の徳をあらわす。⁽²⁾

この説は「現図曼荼羅」を三重構造として捉え、三重という各枠のそれぞれに菩提心・大悲・方便という「三句の法門」の思想を配して解釈するものである。そして特徴的なことは、中台八葉院と初重を、一つの枠にいれていることである。すなわち中台八葉院と初重を因たる菩提心として同格と考えている。ここは三句の考えを中台を含む三重の枠に何とかあてはめようとする意図を窺うことができる。

これに対して『両部曼荼羅随聞記』を見ると、次のような見解が示されている。

和上曰く。三句を以て曼荼羅を釋するに、大分して二種あり。謂く行者の因中にして説くは一なり。如来の果位にして説くは二なり。略して大疏を引いて示さん。疏にいわく、問う前の三句とは、一には菩提心を因と為し、二には大悲を根と為し、三には方便を後と為す。今大悲胎藏曼荼羅に就いて之を説かば、いわく中臺を以て菩提心と為し、八葉を以て大悲と為し、外三院を以て方便と為すなり。——中略——
如来果上にして三句を説かば、中臺を因とし、八葉を根とし、三重壇を合して究竟の句とするなり。行者の因中にして説けば、外院を因として第二第三を根とし、中臺を究竟の句とするなり。⁽³⁾

同じように「三句の法門」で曼荼羅を解釈しながらも、ここでは前者と全く異なる見解が示されている。すなわち前者が「三句」を中台を中心とした各三重の枠に配当したのに比較し、ここでは各重は方便として一括するのである。ちなみに『隨聞記』によれば「中台八葉院は特別な院であるから、三重・四重という枠には数えない」とし、前者の説のように中台と初重を一緒にすることはないとする。

後者の考えは決して特異なものではなく、『諸説不同記』にも「今大悲胎藏曼荼羅に就いて之を説くに、中臺を以て菩提心と為し、外三院を方便と為すなり⁽⁴⁾」とあるように、むしろ伝統的な解釈ともいえる。すなわち「三句の法門」を以て曼荼羅を解釈する点については両者共通するが、これをどう理解するかについては根本的な見解の相違がある、といわねばならない。この問題は、同時に「大日経」所説曼荼羅」と「現図曼荼羅」との解釈の問題にも関係する。なぜなら「大日経」所説曼荼羅」と「現図曼荼羅」とでは内容的に大きな相違があり、前者の如き理解では、異なった内容を持つ両曼荼羅の解釈に矛盾が生じるからである。

言うまでもなく最も大きな問題は、「釈迦院」と「最外院」の取り扱いである。「現図曼荼羅」では「釈迦院」は第二重、「最外院」は第三重に位置する。しかし「大日経」所説曼荼羅」では「釈迦院」と「天部」が同じ院に属して

いるのである。また『大日経』を註釈する『大日経疏』ではこの「釈迦院」を最外院に位置させている。すなわち前者の説によると「釈迦院」は大悲に、「最外院」は方便に相当する。しかし現図曼荼羅の各重に三句を配したこの考えをそのまま『大日経』所説曼荼羅に当てはめた場合、あるいは『経疏』の説にあてはめた場合でも解釈が困難となることは言うまでもない。

覚鑊は胎藏曼荼羅が「三句の法門」の考え方を表していることを意識しているが、両者のように菩提心・大悲・方便を各重に配する形で述べておらず、むしろ四種身説をもって解釈している。それ故、覚鑊の曼荼羅理解については次に述べることとし、ここでは触れない。

四種身説と胎藏曼荼羅

先ほどと同様にまず金剛説を見ると次の通りである。

古来の解釈に従えば、この四重組織は、密教の四身説をあらわすと見られる。

さきの三重建立の説は、『大日経』の菩提心・大悲・方便の展開であると同時に、仏の三身（法・報・応）のそれぞれの建立であるともみられている。いま、四重建立の説は、この三重建立の法相に倣って、その組織を四身建立の法相に依ると見る。

すなわち、中台院と初重は自性法身、第二重は受用法身、第三重は变化法身、第四重は等流法身。⁽⁵⁾

この場合も先ほどと同様に「現図曼荼羅」の解釈である。『両部曼荼羅隨聞記』を見ると次のようである。

一曼荼羅を三重に分ち四重に分つに、共に八葉を数えず。その故は、中院は是れ法界自性の體なればなり。此によつて流出するに三重・四重有り。故に十三大院の時は中院を数えると雖も、三重、四重の時は之を除く。⁽⁶⁾

そして『大疏』の説を意識しつつ、「現凶曼荼羅」を四種身説を以て解釈している。すなわち、

中院は自性身なり。八葉九尊は同一毘盧遮那の故に。一重二重は受用身なり。此に自受用他受用の差排あり。第三重は變化身なり。外金剛部は等流身なり。⁽⁶⁾

とする。この四重曼荼羅の構造は、両者とも「文殊院・蘇悉地院」を第三重とし、最外院を第四重としている。しかしながら、前者は中院と初重を自性法身としているのに対し、後者は中院は自性身とし初重と二重は受用身としている。ここには引證しなかったが、『隨聞記』では初重を自受用身・第二重を他受用身としている。

この考えに対して『秘藏記』は些か異なった見解を示している。

問う、法身と応身と化身と等流身とのこの四種身一身の所具とするや、各各にこの四種身を出生すとするや。答う、一身の所具にみな具足す。皆一門より出現す。

問う、しからはこの四種身は曼荼羅において、何等かその身なるや。答う、中院の毘盧遮那を法身となし、四仏を応身となし、釈迦を化身となし、外金剛部の龍鬼等を等流身となす。⁽⁷⁾

『秘藏記』の考えは前述のものとはかなり異なる。すなわち抛り所とする四身説の相違と四身の配当の相違である。四身説はいずれも三身説を基本としているが、前者が自性・受用・変化の三身説なのに後者は法・応・化の説である。後者の三身説は、『金光明最勝經』⁽⁸⁾などに基づくものであり三身説としては異質であるが、この中の応身はいわゆる法・報・応の三身説の報身に相当するので思想的にはあまり問題はないと考える。それ故なぜ法・応・化なのか、といった問題にはここでは言及しない。

だが四身の配当の仕方は非常に特徴的である。ここでは中院が自性身・受用身に配されることになる。以上のように同じ胎藏曼荼羅を解釈するにも、また同じ「三句の法門」や「四種身説」を以てみても、その理解は

様々であることを指摘した。これらの検討は後述するとして、つづいて覺鑊の胎藏曼荼羅に対する見方を考えることとする。

覺鑊の胎藏曼荼羅觀

覺鑊の曼荼羅理解は、基本的にはその著『**九**界曼荼羅略釋』に見ることができよう。そこでは「三句の法門」を根底に置きながらも、あえて胎藏曼荼羅に配当する方法をとらず、むしろ四種身説を以て述べていることは、前述した如くである。

胎藏大曼荼羅図像の中に、あるいは菩薩、二乗、諸天等あり。あるいは鬼、畜、修羅、種々の異類等の像あり。これその義門なり。およそ仏は三身を得る。いわく法如如、智如如、これを法身と名ずく。十地究竟して、報身を顕得して自受法樂するを自受用身と名ずく。普賢等の菩薩のために、他受法樂するを他受用身と名ずく。衆生の感に随い、処処に示現するを變化身と名ずく。胎藏界中台八葉を自性法身と名ずく。三部の眷属はこれ自受用身なり。第二重の中の諸大心衆は、すなわち他受用身なり。第三重の釈迦仏を變化身と名ずく。六道凡夫等を示すを等流身と名ずく。大日如来、内にこれらの諸身を証すれば、諸經論の中に法如如、智如如、法身仏と名ずく。大日如来この諸身をもって、諸具戒の菩薩をして法樂を受け他受用身と名ずく。大日如来この諸身をもって、諸の凡夫の所感に随つて、普ねく現すれば諸經論の中に応化身と名ずく。⁽⁹⁾

ここでは三身といいつつも、四種身説で捉えているといえよう。覺鑊は他においても、三身説よりむしろ四種身説を多く用いる。たとえば、『真言宗即身成仏義章』においても四種身説をとっている。ちなみに覺鑊の理解する四種身説あげれば次のようである。

問う、如何が自性法身という。余もまたしかるや。

(答う) 一に自性法身とは、いわく本来成仏、常恒不変の故に。法とは軌持軌則の故に名ずけて法という。身とは積聚の義なり。いわく三密の中に無量の三昧門を積集するが故に。

二に受用法身とは、恒沙の功德を受用するが故なり。または応化法身と名ずく。三密相應の故なり。

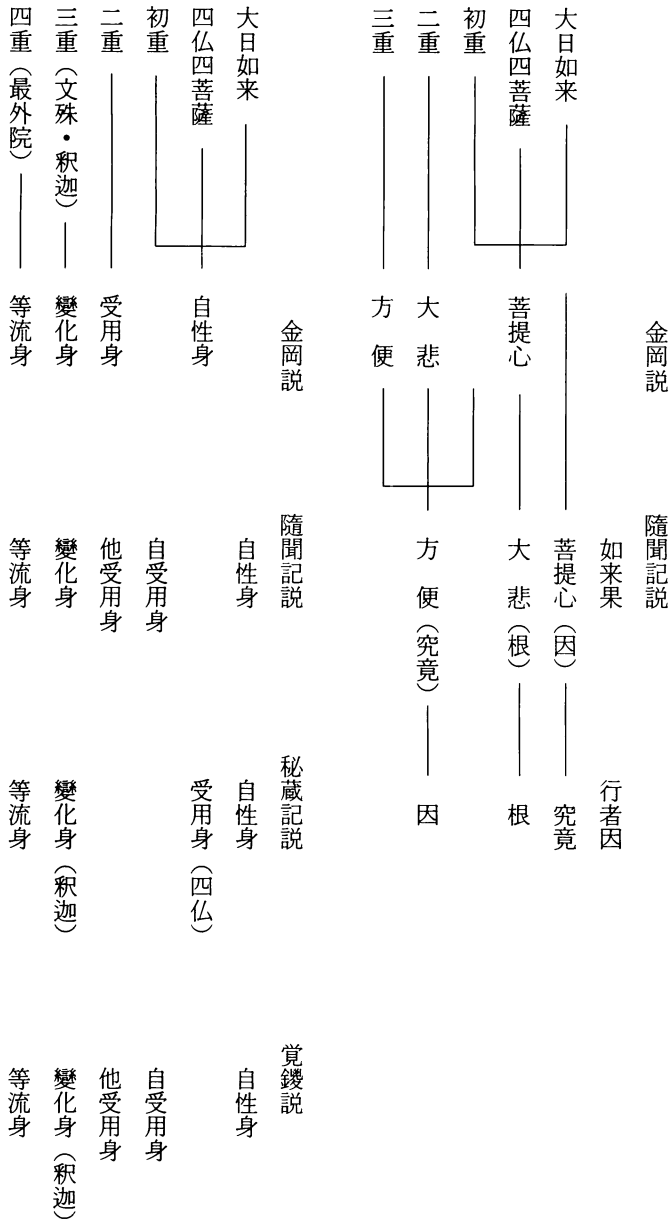
三に変化法身とは、三密の化用現じて休息することなく、乃至自身に印契說法等の相を莊嚴して、しかも無尽の化用あるが故なり。

四に等流法身とは、いわく格別の三昧門を約して自他等流す。よっていわゆる等とは平等、流とは流類なり。⁽¹⁰⁾

こういつた四種身説を以て覺鑊は、胎藏曼荼羅を解釈している。覺鑊は中台を自性身と捉え、初重を自受用身、第二重を他受用身、第三重の釈尊を變化身、そして同じ三重の「六道凡夫等」を等流身としている。これは今まであげた説とはまた異なった立場に立つものである。すなわち覺鑊の曼荼羅理解は、第一に「大日經」所説曼荼羅」に視点を置いていることである。次にそれも『經疏』の理解に従って「釈迦院」を第三重に置く立場を取っていること。そして同じ第三重の「釈迦院」を變化身と等流身として捉えていることが指摘できよう。

おわりに

以上、様々な胎藏曼荼羅の解釈を見てきた。大きく分けて「三句の法門」で理解するもの、「四種身説」で見られるのである。しかもそこには色々な見解が存在していることも確認した。これらは煩雑で分かりにくいので、ここで一旦整理を試みたい。



このように一口に胎藏曼荼羅の解釈、といっても種々あることが解る。但し、覚鑊の場合は前述した如く、『大日経』を抛り所とし『経疏』の考えを根本にしている。言うまでもなく『大日経』具縁品では、釈尊と天部が同じ枠の

中に在り、第二重に置かれる。その「釈迦院」が『経疏』ではそのまま第三重最外院におかれる。そこに「釈迦院」を配した『経疏』の考えに自分の立場をおいたところに、すなわち釈尊を天部とともに「最外院」に配したところに覚鑊の確固たる立場があると考える。

註

- (1) 拙論「興教大師の曼荼羅観(Ⅰ)」(興教大師八百五十年御遠忌記念論集「興教大師覚鑊研究」) 参照。
- (2) 金岡秀友「密教の哲学」(「講談社学術文庫」) 一三四頁。
- (3) 「慈雲尊者全集」巻八、二二五～二二七頁。
- (4) 「大日本佛教全書」44、一二頁上。
- (5) 金岡前掲書、三四～一三六頁。
- (6) 「慈雲尊者全集」巻八、二三〇～二三二頁。
- (7) 「弘法大師全集」二、四一～四二頁。
- (8) 加藤精一「密教の仏身観」二四四頁以下参照。
- (9) 「興教大師全集」上、三二二～三二三頁。
- (10) 「興教大師全集」上、二六一頁。